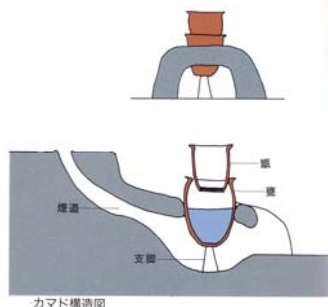
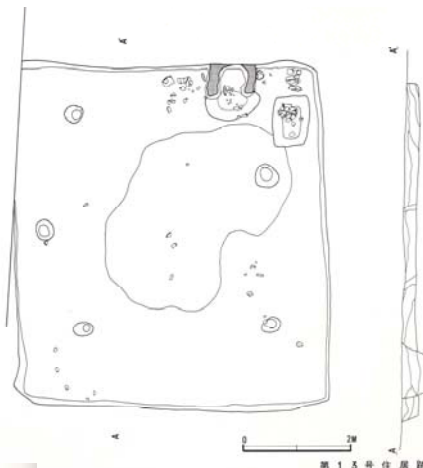
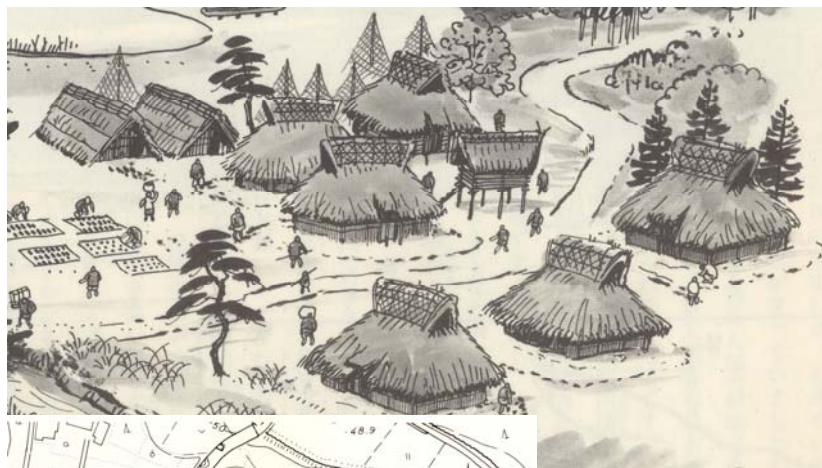
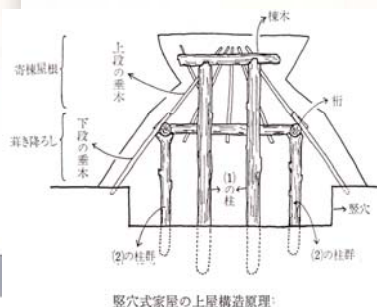


古墳時代の生活と住い



カマド構造図



竪穴式家屋の上屋構造原理



住居跡の発掘状況 建替が何度も行われたため、壁の一部や柱穴などが重なり合っている。



カマド跡 胴長の甕を使いカマドを構築した。

本田・東台遺跡の発掘

地域の古墳時代集落は、谷などの低地に面した台地・丘陵上に分布している。荒川、和田川沿いの台地上にはこの時期の集落が多く見られ、周囲には古墳が築かれている場合がある。中でも須賀広の本田・東台遺跡(古墳時代中ごろから後期)は谷津を挟んで野原古墳と向き合う位置に同時代の人々の住まいが継続的に営まれていた。

住まいの跡は、縄文時代来の竪穴式住居を踏襲しているが、古墳時代には平面形が方形を基本とし、壁の一方方向にカマドを造り付けている。初期のカマドは塩新田遺跡から見つかっている。囲炉裏からカマドへの変化は、食生活の安定と住まいの利便性などをもたらす一大変化で、低地の開発が進み、食料の生産が軌道に乗ったことを示している。集落の中では、鉄器の生産をうかがわせる鍛冶跡や、生活に利用された土器(土師器や須恵器)、石器(紡錘車や編物石)、鉄器(刀子や鉄鏃)などが多量に見つかっている。



—わがまち遺跡展— パンフレット

熊谷市立江南文化財センター (熊谷市千代329)

048-536-1521



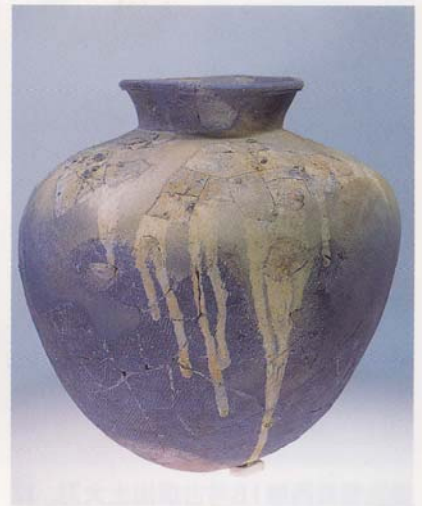
古墳時代の土師器 はじき 貯蔵や煮炊き用の胴長甕、甗、盛り付け用の器とされる坏、などが特徴。本田・東台遺跡出土。



羽口 鍛冶の道具で送風筒の先端部分に使用された。本田・東台遺跡出土。



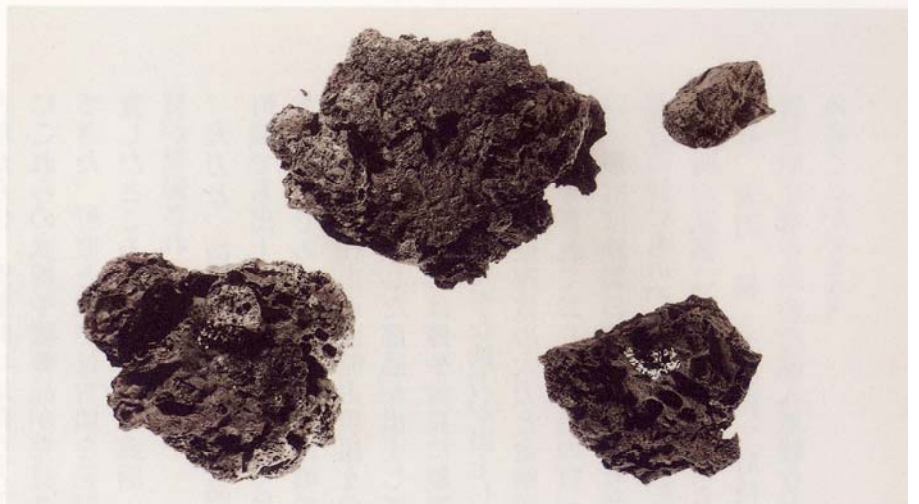
甗と坏の出土状態 こしき 甗は蒸具。本田・東台遺跡出土。



須恵器甕 貯蔵用に使われた須恵器の大甕、町域外で焼かれ集落にもたらされた。



羽口 はぐち 上図を下からみたところ。送風孔がみえる。



鍛冶の住居跡より出土した鉄滓 てっさい 本田・東台遺跡出土。